龍谷大学図書館報
NO. 30

来・ぶらり

大谷探検隊　隊員収集の資料が母校へ

田中　利生（学術情報センター事務部課長）

「父が90年前に収集した資料を父の母校である龍谷大学に寄贈させていただきます。探求の意気に溢れる若い研究者の皆様に閲覧ご利用頂ければ幸いです」

島田明子さんは龍谷大学を訪れ、西本願寺大谷光真ご門主ご臨席の中多くの報道陣の前で、感激深く寄贈目録を神子上学長に渡されました。

寄贈された資料は、20世紀初頭に中央アジアやインドの仏教遺跡を調査した大谷探検隊の一つ、インド隊故藤谷晃道隊員がインドで収集した仏像や現地の写真などの資料です。

故藤谷晃道隊員は島根県・斐川町月光寺の出身で龍谷大学（当時は仏教大学と呼ばれていた）で学び、1912年からインド、チベット調査のため青木文教隊員や多田等観隊員らと共に渡印し、カルカッタを拠点としてインド東部のブッダガヤなどの仏教聖地を発掘調査されました。帰国後は、ハワイ開教に携われ本願寺英語ミッションスクールの設立や「真宗教典」を英語に全訳し、そしてハワイ開教総長となられるなど、その生涯の大半をハワイ開教に注がれました。

今回寄贈された資料は、平成11年兵庫県芦屋市立美術博物館で開催された特別展「モダニズム再考　二楽荘と大谷探検隊」に故藤谷晃道隊員のご息女島田明子さんが来館された際、この展示を企画された同博物館学芸員の和田秀寿さん（本学OB）が故藤谷晃道隊員のことを聞かされたのがご縁でした。

その後、和田さんは継続的に調査を進められ、幾つかの新しい探検隊員の資料や二楽荘に関係する資料を見つけられました。そうした新出資料を含めて昨年前回の展示に続くパートⅡを開催されました。そこにはハワイから出品された故藤谷晃道隊員の資料も有りました。その資料を西本願寺大谷光真ご門主のご進言によりこの度本学に寄贈されたのです。

寄贈された資料は、祇園精舎・仏陀伽耶・鹿野苑・王舎城等から発掘された仏座像、奉献小塔、装飾煉瓦、石材など17点と、インドの当時の様子を撮影したインド写真帖などです。

奉献小塔【右・写真】は、ストゥーパ（仏塔）のミニチュア版で、胴体部分の四面にはそれぞれ高塔建築を模した形の仏龕（ぶつがん）内に仏を彫りだしています。正面に、膝前に左手を置く触地印仏陀、右回りに、六臂の摩利支天菩薩、左手に睡蓮の茎をつまむ与願印観音菩薩などで構成されているもので、信者が大ストゥーパの周囲に寄進したものと思われます。

また、仏座像【左・写真】は淡黄色の砂岩を用い、瞑想風でかつ優しさのあるふっくらとした顔立ち、まとった大衣は体躯にまとわりつき、肉体の輪郭をみせ禅定印を結んで結跏趺坐する仏陀像です。その他故藤谷晃道隊員の写真、本願寺が発令した印度留学への任命書などがあります。これらの資料は大谷探検隊の全貌や今まで殆ど知られなかったインド隊の足跡を明らかにする貴重な資料として学術情報センターに所蔵されることになりました。

島田さんは、「父の収集品が永住の地を得て有り難い。これでやっと父が『ただいま、使命を完了しました』と言っているようです。他の個人所有の探検隊資料も大学に集まれば、隊員の功績に光が当たるのではないか」と話されました。

これらの資料は、現在理工学部の学術フロンティアセンター（AFC）に移され、ただちに撮影や測定調査などが行われています。

CONTENTS

01　大谷探検隊　隊員収集の資料が母校へ　田中　利生（学術情報センター事務部課長）
02　資料の探し方―リーガル・リサーチ―　平野　哲郎（法学部法律学科助教授）
04　図書館の使い方（データベース編：オンライン百科事典“JapanKnowledge”）　川瀬　徳彦（学術情報センター事務部）
06　大宮図書館春季展観より日溪法霖師－生命を懸けて守りぬいた真宗の安心（あんじん）－　青木　正範（学術情報センター事務部主幹）
08　龍谷大学所蔵ドイツ語ちりめん本　中山　淳子（本学名誉教授）

資料の探し方
―リーガル・リサーチ―

平野　哲郎　法学部法律学科助教授

好むと好まざるとにかかわらず、社会で生きていく上で法律との関わりは避けられません。例えば、生協で本を買うことは法律的に言えば売買契約の締結ですし、アパートの部屋を借りることは賃貸借契約の締結です。同じように電車に乗ったり、飲食店で食事をしたりしても全て法律が関係してきます。そもそも、みなさんと龍谷大学との間にも一種の契約関係が発生しているのです。そして、その契約に含まれる一つの内容として、みなさんは大学図書館を利用する権利を持っているのです。法律問題で困ったり、調べてみたいことが生じたときは、この権利を行使して図書館で法的な調査(リーガル・リサーチといいます。)をしてみてください。リーガル・リサーチは、調査の対象によって法令調査、判例調査、文献調査の3種類に分けられます。これらを順に簡単に説明していきましょう。

まず、最初に法令調査の方法です。最も手軽で一般的な法令調査のツールは六法全書でしょう。いくつかの出版社がそれぞれ何種類かの六法全書を出版しています。なお、六法全書という名称は本来は固有名詞ではありませんが、有斐閣が「六法全書」という名前の六法を出版していて、これがおよそ1000件の法令を収録している最大の六法になります。しかし、現在日本で有効な法令は7000件以上ありますから、これでもまだ全ての法令は調べきれません。「現行法規総覧」(第一法規)という出版物には現在日本で有効な全ての法令が掲載されています。これは加除式という形式の出版物で新しく法令が制定されたり、改正されたりするたびに該当部分が差し替えられます。全体では90巻以上あり、深草図書館2階の判例・法令コーナーに置かれています。なお、オンラインで法令を検索する方法も何種類かありますが、ここでは龍谷大学学術情報センター(図書館)のホームページから接続できる「リーガルベース」(日本法律情報センター)というデータベースを紹介しておきましょう。このデータベースは法令・規則など約8000件を収録しており、参照判例とリンクしているのが特徴です。学内のパソコン端末から利用できます。

次に判例調査について紹介しましょう。判例という言葉の定義自体広義、狭義いろいろありますが、ここでは最高裁判所をはじめとする裁判所が下した判決や決定で今後の実務の参考になるものとしておきましょう。判例は公式の判例集や民間の判例・法律雑誌で見つけることができます。公式の判例集として最も権威があるとされているものは最高裁判所が編集している「最高裁判所民事判例集」と「最高裁判所刑事判例集」でそれぞれ民集、刑集と略称されます。これも深草図書館2階の判例・法令コーナーに置かれていますが、今では最高裁判所のホームページ(http://courtdomino2.courts.go.jp/)でも民集、刑集に掲載されている判例を見ることができます。しかし、ホームページでは最高裁判所に至るまでの下級裁判所の判決などの掲載が省略されていますので、事案の内容をきちんと理解するためにはやはり紙の判例集を見なければなりません。なお、最高裁判所のホームページではほかにも高裁判例や行政、労働、知的財産などの分野別の判例も検索することができます。また、最近は各地の裁判所ホームページにもそれぞれの裁判所の判決速報が掲載されています。

ほかに民間の判例雑誌としては「判例時報」と「判例タイムズ」が代表的です。これらは深草図書館1階の雑誌コーナーに置かれています。また、判示事項を条文別に整理した判例索引というツールもあり、その一つである「判例体系」(第一法規)が深草図書館2階の法令・判例コーナーにあります。これは全体で200巻以上の加除式の出版物で判決の結論と理由の要旨が取り上げられています。

また、最近ではオンラインの判例データベースがめざましく発達しており、むしろこれが諸君が判例を調べる際に最初に使うツールかもしれません。判例データベースは、何社かが提供していますが、龍谷大学図書館学生が利用できるものとしては「リーガルベース」(日本法律情報センター)と「LEX/DBインターネット」(TKC)があります。いずれも学内の端末から龍谷大学図書館のホームページに接続して利用できます。これらは、収録範囲やキーワードの設定方法などが違うので、同じキーワー

ドを入れても2つのデータベースで検索結果は異なることが少なくありません。すなわち両方で検索した方がより正確な結果が得られます。最近はいずれのデータベースも雑誌等以外に独自に取材して判例を集めているので、印刷媒体未収録の判例が見つかることもあります

最後に文献調査の方法について説明します。例えばある判例についての説明を読みたいという場合、判例批評を掲載している媒体で学生の参照しやすいものとしては判例百選（別冊ジュリスト）、重要判例解説（ジュリスト増刊）、主要民事判例解説（判例タイムズ増刊）、判例評論（判例時報付録）、私法判例リマークス（法律時報増刊）、判例セレクト（法学教室別冊）、基本判例シリーズ（法学教室増刊）などがあります。いずれも深草図書館1階の雑誌コーナーで見ることができます。また、前述の民集と刑集に掲載された最高裁判例についてはその事件を担当した最高裁調査官が解説した「判例解説」というものがあります。これは「法曹時報」（法曹会）という雑誌にまず掲載され、まとまると「最高裁判所判例解説平成○年度版」（民事篇、刑事篇）として本になります。調査官による判例解説は一般的にほかの判例批評より重視されます。法曹時報は深草図書館1階雑誌コーナーに、判例解説は深草図書館2階法令・判例コーナーにあります。判例批評の情報は前述の判例データベースにも収録されていますが、収録もれも多いので注意が必要です。

さらにある特定のテーマや判例に関して、あるいは特定の筆者の執筆した論文や本を探したいときは、「MAGAZINE PLUS」や「BOOK PLUS」というデータベースが有用です。これらのデータベースも学内端末から龍谷大学学術情報センターのホームページにアクセスして利用できます。

このようなリーガル・リサーチの方法を知っていると法学部で法律を勉強している諸君はもちろん、それ以外の諸君にとっても助けられる場面が人生の中で何度か起きるはずです。是非、図書館でリーガル・リサーチのツールに親しんでみてください。

最高裁判所民事判例集

LEX/DBインターネットメニュー画面

LEX/DBインターネット新規検索画面

MAGAZINE PLUS検索結果画面

図書館の使い方

データベース編

オンライン百科事典“JapanKnowledge”

学術情報センター（図書館）では、数多くのオンラインデータベース（インターネットで各種情報を収集するためのツール）を導入しています。これらのオンラインデータベースのほとんどは、図書館に限らず、学内に設置されてるPC（情報処理実習室など）からであれば、自由に利用することができます。
今回は、その中でも日本大百科全書や現代用語の基礎知識、和英中辞典・英和中辞典等、様々な辞典をオンラインで利用できる「JapanKnowledge（ジャパンナレッジ）」を紹介します。

利用できる辞典・情報と特徴

JapanKnowledgeでは、右表にある百科事典や辞典類、映像・サウンドライブラリ等、ネットワークメディアを生かしたコンテンツを多数利用することができます。

検索結果では、言葉の意味だけではなく、その言葉に関するバックグラウンド（歴史や背景など）がわかり、関連語等の周辺の知識まで補強できます。

使い方もいたって簡単。OneLook検索で、知りたい言葉やキーワードを入力し、検索ボタンをクリックするだけで、すべての辞書・事典からの検索結果が表示されます。

例えば、「マーケティング」と入力して検索すると、マーケティングの関連用語を含めた検索結果一覧が表示されます。それらを比較すると、「市場戦略」というように一言で表現するものから、約2,000文字におよぶ関連知識を含めた詳細なものまで、多様な説明結果を得ることができます。

このように瞬時に多様な結果を得られるということは、特にレポートを書く上で便利です。重要なキーワードやレポートの主題となる言葉を調べる際は、一度利用してみましょう。

また、平凡社の東洋文庫（第1巻（1963.10刊）～）や週刊エコノミスト（2001.12以降）も利用できますので、読みたい文庫や記事があった場合は、即利用できます。

日本大百科全書（ニッポニカ）
大辞泉
現代用語の基礎知識
亀井肇の新語探検
JK Who's Who
日本人名大辞典
Multimedia Internet 事典
科学技術略語大辞典
全国鉄道駅データベース
プログレッシブ和英中辞典
ランダムハウス英和大辞典
プログレッシブ英和中辞典
最新英語情報辞典
Encyclopedia of Japan
映像記録1908-2003
Rand McNally世界地図
大自然ビデオライブラリ
図解アニメーション
ミュージックライブラリ
サウンドライブラリ
年表
国旗・国歌総一覧
東洋文庫
週刊エコノミスト
etc.

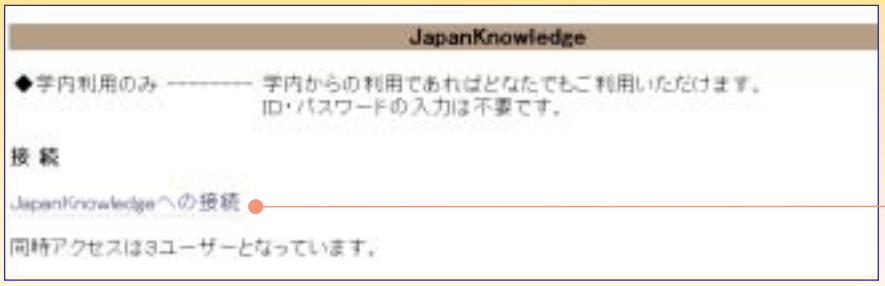
検索方法と基本画面説明

1. JapanKnowledgeの選択

JapanKnowledgeは学術情報センターホームページ（http://opac.lib.ryukoku.ac.jp）から利用できます。接続方法は、下記の順番でクリックするだけでOKです。

①学術情報センターHPから、「検索・電子ジャーナル」ボタンをクリックします。

②資料検索ページから、「JapanKnowledge」をクリックします。



③接続ページから、「JapanKnowledgeへの接続」をクリックします。

④JapanKnowledgeトップページが表示されるので「ログイン」ボタンをクリックします。

2. JapanKnowledgeの画面構成

JapanKnowledgeでの基本検索画面となるOneLook検索画面です。

❶JapanKnowledgeで利用できるメニュータブです。
❷検索したい言葉を入力します。また、「見出し」「見出し＋キーワード」「全文」など、検索範囲も選択できます。
❸OneLookで検索できるコンテンツ一覧です。標準では、全てにチェックが入っているので、特定の辞典のみで検索したい場合は、チェックをはずしてください。
❹ログアウトボタンです。利用終了後は、必ずこのボタンをクリックしてください。

3. JapanKnowledgeでのOneLook検索の流れ

OneLook検索では、以下の手順で検索することができます。

①検索語の入力

入力窓に検索したいキーワード等を入力してください。

②検索範囲・条件の設定

検索範囲・条件の設定をします。通常は見出しのみの検索となっていますので、より幅広く検索結果を得たい場合は、「見出し＋キーワード」「全文」を選択します。

・見出し……各コンテンツの見出し語（またはタイトル）から検索します。
・見出し＋キーワード……見出し語に加え登録されているキーワードを検索範囲に加えて検索します。
・全　文……各コンテンツの本文全てを検索範囲として検索します。
・スペースをAND検索で使う……スペースを複数の検索語の区切りとする場合にチェックを入れます。

大宮図書館春季展観より

日溪法霖師

―生命を懸けて守りぬいた真宗の安心(あんじん)―

入出二門偈窺斑録(法霖著 刊本)　二巻 三冊

法霖が著した『入出二門偈窺斑録』の元文四年(1739)刊の刊本。本刊本は上下二巻からなり、下巻は二冊に分かれている。袋綴。縦26.0センチ×横17.7センチ。

龍谷大学学術情報センター(大宮図書館)では毎年春秋2回の展観を開催し、貴重書等を一般公開している。

今年度の春季展観は龍谷教学会議との共催で「江戸時代の本願寺教育制度」と題し、6月23日から7月2日まで開催した。今回の展観は、本学の淵源(えんげん)ともなった本願寺学寮(がくりょう)・学林(がくりん)に焦点をあて、教学の責任者である能化(のうけ)や学匠(がくしょう)の事績(じせき)、学事運営の歴史に関わりのある史料を展示した。西本願寺門主大谷光真師も熱心に展示品をご覧になられたことは大変喜ばしいことである。

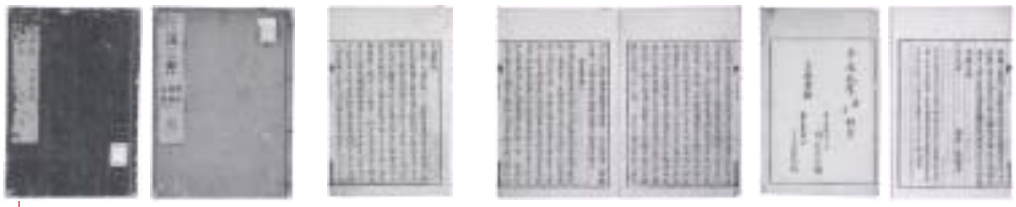
さて、龍谷大学の前進である「学寮」は、寛永16年(1639)11月本願寺第13世良如宗主によって本願寺境内に建てられ、河内善光寺の准玄(じゅんげん)を能化に任ぜられたのが始まりである。能化以下多くの学僧たちの学問・法論に対する姿勢は、実に真剣そのものであって、真宗安心(あんじん)の要(かなめ)に至っては命懸けの法論が闘わせられ対処せられたことが読み取れる。今回の展観からその姿勢を如実に現している展示物を拾ってみた。

「法霖講主遺偈(臨末偈)」

法霖師(ほうりんし)(1693〜1741)は元禄六年、現在の和歌山市関戸に生を受け、慧淋(えりん)と称したが、27歳にして西本願寺学林に入り能化(のうけ)若霖師(じゃくりんし)に師事(しじ)した。この頃、名を法霖と改め、若霖師の住持する滋賀県蒲生郡日野町の正崇寺の法嗣(ほうじ)となった。

若霖師の後を継いで能化となった法霖師は、本願寺第16世湛如宗主(たんにょしゅうしゅ)の教育を行っていた。湛如宗主と法霖師とは大変親しく麗しい関係であったが、ひとたび「安心」

展観風景



日渓三書（法霖著　安永版刊本）　三巻　一冊

展示品は、『日渓学則』（一巻）・『日渓独語』（一巻）・『日渓鳥語』（一巻）が共に合刻され、安永九年（1870）に『日渓三書』として開版された刊本。安永版の『日渓学則』の部分は『日渓学則』明和版と若干の文字ズレ行ズレをおこしているが丁数は一致している。巻末に明教院僧鎔の跋が記されている。袋綴。縦26.3センチ×横19.0センチ。

のこととなれば非常に厳格をきわめた。若き湛如宗主は病気がちで、寛保元年正月頃から病状が悪化し始めた。これを心配された御裏方は東山天皇の孫にあたり、閑院直仁親王の姫君、始宮であり、盛大に病気平癒の加持祈祷をされた。これは浄土真宗にとっては最も否定されなければならない大問題であり、真宗教学最高の地位にある能化法霖師は日夜心配され、ついに意を決して、この状況を宗主につぶさに報告説明されたのである。

ご自身の病気に対し門信徒の間で加持祈祷がなされていることに驚きと深い悲しみを抱かれた湛如宗主は、寛保元年6月8日、26歳の若さで遷化された。世間では宗主への加持祈祷の空しさが浸透し意気消沈したものの、法霖師はご自身の行動が結果的に宗主の寿命を縮めたことに心を痛め、静かに殉死を考えていたようで、宗主の百ケ日法要を終えるや、駕籠で京都から自坊の日野正崇寺へと向かった。

法霖師は同年10月17日、正崇寺へ到着する直前、駕籠の中で腹をかき切られたのである。騒ぎを聞きつけた高弟たちは、和上を本堂へ。法霖師は最後の力を振り絞り、高弟たちの見守る中、四句の詩を書きつつ息が絶えた（下写真）。

往生一路平生決　今日何論死与生
非好蓮華界裡楽　還来娑界化群萌

行年49歳であった。今回の出品はこの時の臨末偈を後世に伝えるべく石に彫られたものを拓本にしたものであり、生命を懸けて病気平癒の祈祷を排除した法霖師の最期を示す絶息の頌である。

絶息頌

第四代能化法霖講主影像（模写）　一幅　107.1×41.9
法霖（1693〜1741）
第四代能化　姓・雑賀　号・日渓、松華子　諡・演暢院

『龍谷講主伝』などによれば法霖は身の丈七尺二寸という長身であったといわれている。また講義の際には一紙の備忘録さえも用いずに、滔々と講義したといわれている。たまたま忘れてしまったところがあれば、頭頂の智慧くぼに指をのせればたちどころに思い出して述べることが出来たという。そこで学林の聴衆は「霖公の脳裏三蔵仍ち百会をいだす」と嘆じたという。この肖像画はその姿をあらわしたものである。

龍谷大学所蔵 ドイツ語ちりめん本

深草学舎図書館は夏休み前、赤本など江戸の伝統をひく木版画の美しい絵入り本の展示を行った。明治18年夏から弘文社長谷川武次郎が出版したもので、平紙に印刷した本と、皺を寄せた柔らかい縮緬紙の本があり、日本の昔話などを数種の外国語に訳した芸術的、文化的価値の高い本だ。そのうちの一冊、ドイツ語『孝女白菊詩』はこれまで誰も詳しく検証した人がなく、数々の発見があった。長谷川武次郎氏のお孫さんの西宮氏の元には、オランダ語のただ一冊を欠くのみで、すべて保存されていると、グリム研究家で、縮緬本も蒐集されている虎頭恵美子氏から伺った。英語のものは一般にもかなり現存しているが、その他は出版数も少なく、龍谷大学にドイツ語『桃太郎』『舌切り雀』『猿蟹合戦』『花咲爺』『松山鏡』の平紙本5冊と、縮緬本『孝女白菊詩』があるのは貴重だ。

『孝女白菊の詩』はドイツのアメラング社からも売り出され、龍大所蔵は、ドイツ語「第2版」とあり、奥付は日本語の明治28年9月に重ねて、アメラング社の後続本予告がある。ところが訳者フローレンツ（Karl Florenz）の前書は1898年（明治31）夏とある。前書が発行日より遅いという不可解な事情は、今のところ解明できない。手に持つと、柔らかく軽い。ドイツ語タイトルは単に「Weissaster（白菊）」だが、前書には「孝女白菊の詩」という日本語がドイツ語の中から浮かび上がっていて、下の方にNaobumi Ochiaiとある。これが元で、法政大学のアン・ヘリング氏が指摘しているように、この本の書誌が混乱している。前書きには「東京大学哲学教授の井上哲次郎（巽軒）の漢詩の翻案である」と明記され、後の注にも「（漢詩の訳も）「白菊」と同じく井上の『巽軒詩鈔』から採った」と書いてあるにもかかわらず、原著者として落合直文の名もあり、中には落合の名前だけの書誌もある。フローレンツは、「落合が井上の漢詩を翻訳して大流行している」と書いているにすぎない。『巽軒詩鈔』は明治17年、落合の日本語訳『孝女白菊の詩』は明治21年出版で、井上はフローレンツの日本語の師であり、フローレンツは中国文学研究者で漢詩が読めた。ドイツ語『孝女白菊の詩』にとって落合の日本語訳は井上の漢詩の傍証にすぎず、落合の名前が原著者として書誌に出るのはおかしい。井上は廂を貸して母屋を盗られたようだ。また、フローレンツが、日本では父親への孝女とされる白菊を、婚約者に真を通した中世ヴァイキング叙事詩のグードルーン（Gudrun）になぞらえていることは、文化的社会的に意味がある。「白菊」の後に訳されている井上の漢詩については、『巽軒詩鈔』の復刻版が大宮図書館にあるので、「夜帰」だと私は判断した。夜の凄さは漢詩が勝る。

※ちりめん本とは
和紙に活字を印刷し、織物の縮緬（ちりめん）と同様な感触になるように特殊加工して作られた小冊子です。

平忠度の和歌とあるのは、意味から察して、勅撰和歌集に入れられた十首のうちの一首で、平家物語にもある

「行きくれて木の下かげを宿とせば花やこよひの主ならまし」だと私は判断する。

続く第Ⅱの和歌が「読み人知らずの反歌」とあるのは間違いで、藤原公任の本歌

「春きてぞ人もとひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ」である。

これだけの内容の重みに対して残念至極なのは新井周次郎（芳宗）の挿絵で、内容を理解しないまま描いたらしく、あの平家物語の中でも優雅な公達を描くべきところを、尻端折に脚絆草鞋で振り分け荷物の男が、風雅とはほど遠い顔をして、品格のないお行儀の悪さで寝ているではないか。

（本学名誉教授　中山　淳子）

books essay・エッセー募集

次号（4月発行予定）に掲載するエッセー（600字～650字）を募集します。本や図書館をテーマにしたものであれば、なんでも結構です。

※採用された方には図書券を差し上げます。詳しくは各図書館カウンターまで。

龍谷大学図書館報
来・ぶらり 第30号
2004年10月発行
編集・発行　龍谷大学学術情報センター
〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
TEL. 075-645-7885（ダイヤルイン）
http://opac.lib.ryukoku.ac.jp